

無頼文学辞典

久保田芳太郎・伴悦
島田昭男・矢島道弘
編

東京堂出版

編者略歴

久保田芳太郎（くぼた・よしたちろう）
 一九二七年生まれ。早稲田大学大学院修了。現在、東横学園女子短大教授。著書『戯作と無頼』（現代思潮社）。
 島田昭男（しまだ・あきお）
 一九三〇年生まれ。早稲田大学大学院修了。現在、早稲田大学講師。著書『昭和作家論』（審美社）。
 伴悦（ばん・えつ）
 一九三〇年生まれ。早稲田大学大学院修了。現在、龍谷大学助教授。著書『岩野泡鳴論』（双文社）。
 矢島道弘（やじま・みちひろ）
 一九三七年生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、国語国文学専攻科修了。現在、東横学園女子短大講師。著書『悪鬼たちの復権』（三弥井書店）。

検印
 廃止

無頼文学辞典

定価 二九〇〇円

昭和五五年一〇月一五日 初版印刷
 昭和五五年一〇月二五日 初版発行

編者 久保田 芳太郎
 矢島 道弘

発行者 岩出 貞夫

印刷所 図書印刷株式会社
 製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒一〇〇）
 電話 東京（三三局）三三〇一 振替東京 三三〇七

はしがり

太宰治、坂口安吾、織田作之助、田中英光らをはじめとする、いわゆる無頼派作家の個別的研究は、今まで広範な研究者によって精力的、持続的に行なわれてきており、周知のごとく、その成果としての文献・資料の類はおびただしい数にのぼっている。そしてこの個別研究の成果は、当然のことながら無頼派作家の現代日本文学史への位置付け作業（それは文学史の再検討——改変、改訂の試みにつながりもするが）をもたらし、派ハッシュおよび作家個々の果たしてきた文学（史）的役割と意味は、かなりの程度まで鮮明になってきている。だが、ことわるまでもなく、その作業はまだ完全な域に達してはおらず、個別研究のいっそうの精密・深化と併せながら、さらに質的に充実させていくことが望まれている。

この辞典はそうした無頼派文学の研究現状を念頭に、今後の研究の一助になることを願って編纂された。編纂するにあたって留意した点は、まず一時期に限定されている無頼派文学から無頼文学へと範囲を拡げ、近・現代の日本文学を対象としたこと。つぎに辞典の性格上、収録作家および作品に関する記述はあくまでもその無頼的傾向、特質を中心とし、内容的に取捨選択を施したことで、これは関係作家や人物においても

同様であり、無頼文学・作家との文学・生活上のかかわりを重視するかたちでまとめた。そしてこれらに新たな調査、資料にもとづく諸項目——雑誌、関係事項、語句などの解説を加え、近・現代日本文学のなかで無頼文学・作家が具体的にいかなる創造的役割を果たしてき、それが今日どのような文学的意味を持っているのか、が容易かつ明確に把握できるように考えた。

このような試みは最初のものであるだけに、個々の作家・作品の分析や評価、項目選定、叙述方法などをはじめ数多くの問題があり、それらの検討・解明には相当の困難さがつきまとわざるをえず、長い時間を費す結果となった。

ここに一つのまとめとして提出することができるようになったのは、十数年に及ぶ「無頼文学研究会」の貴重な研究蓄積があったことにもよろうが、同時に執筆者の方々の献身的な御協力によるところが大きかったといえる。おそらくそれがなかったならばこの仕事は完成しなかったであろう。

その点で御多忙のなか快く御協力下さった執筆者の方々に、心から深く感謝申し上げます。

ところで以上のような趣旨、経緯で編纂されたこの辞典が、無頼文学・作家に関心を持ち、その全貌を見究めたいと願う人々にとって、多少なりともお役に立つことができれば編者として望外の喜びである。そして、最初の試みであるがゆえに持つであろう問題点について、忌憚なき御批判と暖かい御教示をいただくことができれば、さらにそれは倍加することになる。

なお付記すれば、今後の文学状況の変化、進展と文学研究の深化にともない、新たなまとめを必要とする時期が訪れるであろうが、それに充分応えうるよう精進したいと考えている。

最後になって誠に恐縮であるが、企画・進行の労をとられた東京堂出版編集部の西哲生・今泉弘勝・小林英太郎・池畑成功の諸氏に、改めて厚くお礼を申し上げたい。

一九八〇年一〇月

久保田 芳太郎

島 田 昭 男

伴 悦

矢 島 道 弘

凡 例

一、この辞典は、無頼文学に関する近・現代の日本文学を対象とし、作家、作品、関係文学者、関係人物、雑誌、関係事項・語句を説明したものである。

一、項目は、五十音順に配列した。

一、項目の下に読み方を付した。人名については、行かえにより姓と名の区別を示した。

一、解説は、原則として当用漢字、現代かな使いによったが、必要と認めた場合は、当用漢字以外の漢字も用いた。

一、解説中、引用文のかな使いは、原文に従った。引用文中の／（斜線）は、改行を示す。

一、解説中の「」は、雑誌・新聞・全集名、引用文、強調語句を示し、『』は、作品名を示す。

一、〔文献〕では、「」は、掲載論文、雑誌・新聞・全集名を示し、『』は、単行本を示す。

一、関連項目は、↓をもって示した。

一、巻頭に、分類項目表を付した。

編集委員・執筆者一覧（五十音順）

〔編集委員〕

〔執筆者〕

青柳達雄	秋山清	大森盛和	関口安義	橋詰静子	山内祥史
五十嵐康夫	青柳達雄	大屋幸世	関根和行	長谷川泉	山岡明
大屋幸世	五十嵐康夫	岡本卓治	相馬正一	長谷川吉弘	山崎一穎
荻久保泰幸	池内規行	荻久保泰幸	曾根博義	畑實	山路峯男
神田重幸	石内徹	川合道雄	高松敏男	花田俊典	山敷和男
菊地弘	石崎等	神田重幸	竹内清己	原子朗	山本昌一
久保田芳太郎	石割透	菊地弘	竹田日出夫	伴悦	吉田永宏
島田昭男	磯貝英夫	久保田芳太郎	竹盛天雄	平塚昇二	米倉育男
塚越和夫	岩田恵子	栗坪良樹	玉置邦雄	船戸鏡聖	渡部芳紀
伴悦	瓜生鉄二	黒田征	千葉俊二	古林尚	
矢島道弘	越次俱子	佐々木雅彦	塚越和夫	法橋和彦	
山敷和男	榎本隆司	島田昭男	鶴谷憲三	堀江晋	
山本昌一	大久保典夫	清水茂	東郷克美	松本鶴雄	
	大河内昭爾	鈴木敬司	長篠康一郎	森安理文	
	大塚博	鈴木享	中島国彦	矢島道弘	

分類項目表

作家

生田葵山	元
石上玄一郎	二〇
石川 淳	二三
岩野泡鳴	二三
内田魯庵	二五
宇野千代	二七
梅原北明	三九
大泉黒石	四〇
大杉 栄	四一
岡本かの子	四九
岡本 潤	五一
小栗風葉	五二
尾崎士郎	五五
尾崎放哉	五七
織田作之助	五九

葛西善藏	六八
仮名垣魯文	七三
金子光晴	七四
嘉村礒多	七七
川上眉山	八一
川崎長太郎	八二
菊岡久利	八四
北原白秋	八七
きだ　みのる	九〇
草野心平	一〇〇
斎藤緑雨	一〇〇
坂口安吾	一三三
島田清次郎	一四〇
高橋新吉	一五七
武田麟太郎	一五八
武林無想庵	一六〇
太宰　治	一六二
田島象二	一六六

田中英光	一六八
谷崎潤一郎	一七一
種田山頭火	一七二
田村俊子	一七五
檀　　一雄	一七七
近松秋江	一八五
辻　潤	一九四
直木三十五	二四四
永井荷風	二五五
中里介山	二七七
長田幹彦	三〇〇
中西梅花	三〇〇
中原中也	三三三
成島柳北	三六六
野坂昭如	三三三
萩原恭次郎	三五五
萩原朔太郎	三六六
萩原蘿月	三八八
林芙美子	二四四
葉山嘉樹	二四六
平戸廉吉	二五〇
平林たい子	二五三
廣津柳浪	二五五

作品

深沢七郎	二五九	作 品	哀嬬記（松尾一光）	……三
藤野古白	二六二		蒼白き巢窟	……五
牧野信一	二八三		（室生犀星）	……二五
正宗白鳥	二八五		浅草紅団（川端康成）	……二一
真杉静枝	二八六		あにいもうと	……
宮武外骨	二九六		（室生犀星）	……二四
三好十郎	二九八		あめりか物語	……
矢野 朗	三〇四		（永井荷風）	……二四
吉井 勇	三〇九		荒 魂（石川 淳）	……二五
吉行淳之介	三〇〇		或る女（有島武郎）	……二五

如何なる星の下に

(高見 順) ……六

遺 族 (緒方 嶺) ……六

異端者の悲しみ

(谷崎潤一郎) ……七

一の酉 (武田麟太郎) ……七

今戸心中 (廣津柳浪) ……元

いやな感じ (高見 順) ……三

色ざんげ (宇野千代) ……三

ウィヨンの妻

(太宰 治) ……三

エロ事師たち

(野坂昭如) ……四

カインの末裔

(有島武郎) ……五

限りなく透明に近いブルー

(村上 龍) ……六

火宅の人 (檀 一雄) ……七

哀しき父 (葛西善蔵) ……七

菊岡久利詩集

(菊岡久利) ……七

鬼無鬼島 (堀田善衛) ……九

虚構の彷徨 (太宰 治) ……九

金閣寺 (三島由紀夫) ……九

近世無頼 (城 左門) ……九

苦の世界 (宇野浩二) ……三

狂い風 (梅崎春生) ……四

黒 髪 (近松秋江) ……五

けものたちは故郷をめざす

(安倍公房) ……六

獣の戯れ

(三島由紀夫) ……六

業 苦 (嘉村礒多) ……二

「Coen」のなげき

(武林無想庵) ……二

腰巻お仙 (唐 十郎) ……二

骨 肉 (近松秋江) ……二

子供たちに

(田中英光) ……二

湖畔手記 (葛西善蔵) ……七

子をつれて

(葛西善蔵) ……二

桜の森の満開の下

(坂口安吾) ……二

自殺案内者

(石上玄一郎) ……三

自殺未遂 (荒木 巍) ……三

自叙伝 (大杉 栄) ……三

刺 青 (谷崎潤一郎) ……三

至福千年 (石川 淳) ……元

社会百面相

(内田魯庵) ……二

邪宗門 (高橋和巳) ……二

神經病時代

(廣津和郎) ……四

人生劇場 (青春篇)

(尾崎士郎) ……七

深夜の酒宴

(椎名麟三) ……四

砂の上の植物群

(吉行淳之介) ……四

青春の逆説

(織田作之助) ……四

青春の門 (五木寛之) ……四

青春放浪 (檀 一雄) ……五

生々流転

(岡本かの子) ……五

聖ヤクザ (田中英光) ……五

世 相 (織田作之助) ……五

大菩薩峠 (中里介山) ……五

太陽の季節

(石原慎太郎) ……五

高橋阿伝夜叉物語

(仮名垣魯文) ……五

墮落論 (坂口安吾) ……七

耽 溺 (岩野泡鳴) ……八

耽 溺 (小栗風葉) ……八

地 上 (島田清次郎) ……八

父を売る子

(牧野信一) ……八

地底の歌

(平林たい子) ……八

偷 盗 (芥川龍之介) ……八

月に吠える

(萩原朔太郎) ……八

デカダン作家行状記

(柴田錬三郎) ……九

デカダン文学論

(坂口安吾) ……二

ですべら (辻 潤) ……二

天狗斬られの仙太

(三好十郎) ……二

天国の記録

(下村千秋)……二〇四

東京のプリンスたち

(深沢七郎)……二〇六

道化芝居 (北條民雄)……二〇八

土曜夫人

(織田作之助)……二二二

肉体の文学

(田村泰次郎)……二二六

肉体の門

(田村泰次郎)……二二六

人間失格 (太宰 治)……二二八

人間滅亡の唄

(深沢七郎)……二二八

白痴 (坂口安吾)……二三〇

白頭吟 (石川 淳)……二三〇

爆裂弾記 (花田清輝)……二四〇

馬喰の果て

(伊藤 整)……二四二

花と龍 (火野葦平)……二四二

微光 (正宗白鳥)……二五〇

HUMAN LOST

(太宰 治)……二五〇

風媒花 (武田泰淳)……二五八

冬の宿 (阿部知二)……二六四

文学者となる法

(内田魯庵)……二七四

遍歴 (宮嶋資夫)……二八二

泡鳴五部作

(岩野泡鳴)……二八二

放浪記 (林美美子)……二八三

澤東綺譚 (永井荷風)……二八三

マタイ伝 (北原武夫)……二八七

抹香町 (川崎長太郎)……二八八

木乃伊の口紅

(田村俊子)……二九三

密猟者 (寒川光太郎)……二九三

麦死なず

(石坂洋次郎)……二九六

焼跡のイエス

(石川 淳)……二九〇

野狐 (田中英光)……二九〇

憂鬱なる党派

(高橋和巳)……二九七

夕張胡亭熟景観

(檀 一雄)……三〇八

夕日と拳銃

(檀 一雄)……三〇八

妖婦 (織田作之助)……三〇九

老残 (宮地嘉六)……三二三

老子とその子

(大泉黒石)……三二三

別れたる妻に送る手紙

(近松秋江)……三三五

関係文学者

青山光二……三五

赤木桁平……三六

芥川龍之介……二

浅見 淵……三

伊藤野枝……三七

井伏鱒二……三八

伊馬春部……三〇

臼井吉見……三〇

江口 清……三〇

江口榛一……三〇

大井廣介……三〇

太田静子……三〇

太田治子……三〇

小川 徹……三〇

奥野健男……三〇

尾崎一雄……三〇

織田昭子……三〇

小田巖夫……三〇

亀井勝一郎……三〇

河上徹太郎……三〇

川端康成……三〇

菊田義孝……三〇

木山捷平……三〇

葛巻義敏……三〇

小林秀雄……三〇

小山 清……三〇

小山祐士……三〇

今 官一……三〇

坂口五峯……三〇

佐藤春夫……三〇

志賀直哉……三〇

白崎礼三……三〇

瀬川健一郎……三〇

田中光二……三〇

津島美知子……三〇

津島佑子	一七
戸石泰一	二〇五
十返 肇	二〇九
豊島與志雄	二三
中谷孝雄	二九
中村地平	三五
野口富士男	三三
埴谷雄高	三三
平野 謙	三二
深田久彌	二六
富士正晴	二六
古谷綱武	二七
別所直樹	二八
真鍋呉夫	二九
水上 勉	二九
南川 潤	二九
保田與重郎	三〇
矢田津世子	三〇
山岸外史	三〇
若園清太郎	三〇

関係人物

小山初代	二四
腰野タケ	二四
坂口三千代	二六
長島 萃	二八
宮田一枝	二九
山崎富栄	三〇

雑 誌

青い馬	三
青い花	四
赤と黒	八
海 豹	九
近代文学	九
現代文学	一〇
作 品	二六
作 品	二七
桜	二八
新 人	二八
綜合文化	二五

ダムダム (DANDAM)

長篇文庫	一八
月とスッポンチ	一九
東北文学	二〇
肉 体	二七
日本浪漫派	三九
鶴	四七
光	四九
文 科	五〇
文芸汎論	五九
文 體	六〇
MAVO	六〇
団団珍聞	六二
ろまねすく	六三
若 草 (VAND)	六四

関係事項・語句

赤線・青線	六
悪	九
アナーキズム	一三
安吾忌	一六
家(家庭)	一六

英光忌

エロティシズム	四一
桜桃忌	四二
下降志向	四七
カストリ雑誌	五〇
狂気(くすり)	五三
キリスト教	五五
暗い谷間	一〇三
グロテスク	一〇五
戯 作	一〇六
故 郷	一一三
サンボリズム	一一〇
自殺	一一三
自然主義	一二四
児童文学	一二六
斜陽館	一二三
昭和一〇年代	一四三
新戯作派	一四四
前衛派	一五三
善哉忌	一五四
太宰治賞	一五五
ダダ	一六七
耽 美	一八三

追悼号一覽……………	一八
デカダンス……………	一九
転向……………	二〇
道化……………	二〇
毒婦物……………	二一
ノンセンス……………	二四
破滅型……………	二四
パンの会……………	二六
不安の文学……………	二五
風俗小説……………	二五
仏教……………	二六
無頼派……………	二五
無頼文学……………	二六
無頼文学者と病跡学……………	二六
無頼文学と西鶴……………	二七
無頼文学と近松……………	二七
文学碑……………	二五
マルキシズム……………	二九
雄山荘……………	三七
私小説……………	三五

無頼文学辞典

あ 行

哀 嬬 記

あらいき

松尾一光。短篇小説。昭和二年五月、

「文壇」に發表。

「内容」主人公の私は戦後の瓦礫の街で、ひとり「故知らぬ憂鬱に悩まされ」、常に「皮膚をめくるやう」な孤独と不安、現実に対する疲労感にさいなまれている。それは戦争体験によってもたらされたものというより、出征前にある女と過ごした「悩ましい不純な生活」によって受けた「傷の痛み」をいまだに断ち切れないでいるからである。

戦争前、私は偶然知り合った二つ年上の葉子という女と同棲していた。職を失った私のために女は酒場に出るようになり、そのうち「哀しい過ちを犯」し、別の男との交渉をもつようになった。初め嘘をついていた女もついに告白する。私は自らの不徳を反省するものの、日陰者の屈辱と羞恥に耐えられず、女の外泊した朝など肉体的な苦痛を与え、お互い愛情がないわけではなかった。唯それを素直に表現するには、二人の間にはもはやどうしようもない溝が出来て

しまったのだった。意地の張り合いから女は私のもとを去って行った。私は今、女がその男にも捨てられ、二度目の自殺を図ったと聞いて、「烈しい心の痛み」を感じている。「評価」この作品は伊藤整の推薦によって「文壇」に掲載された。「群像」（昭22・8）の創作合評で、伊藤や青野季吉は作品の部分的な欠点を指摘しながらも、「一種のデカダンスに陥った地獄」をよく書いており、そこに作者の「見る人としての耐える力が現われている」と評している。構成や表現に稚拙さがあり、特に誇張した用語の繰り返しはかえって内実の稀薄さを感じさせるが、田中英光に似たデカダンス、自己の生活上の無頼を、戦後いち早く作品化している点で注目される。

（青柳達雄）

「文獻」青柳達雄「松尾一光論」（『無頼派の文学・研究と事典』昭49・8、教育出版センター）。

青い馬

あおい

同人雑誌。

昭和六・五―七・三。全五

冊。岩波書店発行。編集兼発行者は坂口安吾の名義になっているが、実際はほかに、本多信、葛巻義敏の三人で編集にあたり、山沢種樹、若園清太郎らが協力した。三号以後は坂口、葛巻の二人が編集から手を引き、本多、江口清が中心になって編集を担当した。同人は、本誌が紙面の体裁上同人雑誌らしくなく見せかけるため同人名を記しておらず、必ずしも明確でないが、本誌が同人誌「言葉」の後継誌であることから、「言葉」創刊時の同人一八名に阪文緒、山田

吉彦（きだみのる）が加わり、また後に参加した人に片山勝吉、鶴殿新一、西田義郎、多間寺龍男、大久保洋らがいる。菱山修三は準同人格であったという。

『内容・性格』アテネ・フランセに關係した文学青年たちの同人誌「言葉」は、フランス文学の翻訳紹介を主としたものであったが、同人たちの創作意欲が強まった結果、本誌では詩、評論を含めた創作の欄が大幅に拡張された。山田吉彦らの尽力で岩波書店から刊行されたが、本誌は岩波書店が刊行した唯一の同人雑誌である。

『関係』本誌の意義は、坂口安吾を新進作家として送り出したことに認められる。坂口は本誌に「ふるさとに寄する讃歌」「ピエロ伝導者」「風博士」「黒谷村」「FARGEに就て」のほか、J・コクトオの『エリック・サティ』（訳及補註）、P・ヴァレリーの『ステファヌ・マラルメ』などの翻訳を発表している。坂口が牧野信一主宰の『文科』に参加したことも原因して廃刊した後、本誌は「紀元」に引き継がれることになったと見なしうる。

（黒田 征）

『文獻』坂口安吾「青い絨毯」（中央公論 昭30・4）、江口清「『青い馬』のことなど」（中央公論 昭30・9）、菱山修三「坂口安吾の青春」（『坂口安吾選集』月報5、昭31・12、冬樹社）、葛巻義敏「坂口安吾のこと」（『坂口安吾選集』月報6、昭32・1）、若園清太郎「わが坂口安吾」（昭51・6、昭和出版）。

青い花

あおい

文芸同人誌。昭和九・一二。全一冊。

青い花編輯所発行。編輯発行人今官一。同人は、岩田九一、伊馬鶴平、斧稜、太宰治、檀一雄、津村信夫、中原中也、太田克巳、久保隆一郎、山岸外史、安原喜弘、小山祐士、今官一、北村謙次郎、木山捷平、雪山俊之、宮川義逸、森敦の一八名であった。

『内容・性格』『海豹』を脱退した今官一、太宰治が中心になって、昭和九年九月中旬頃、発行を企画。九月から一〇月にかけて、同人を糾合するための勧誘を行ない、一〇月六日初顔合わせ会を開催、十一月二〇日原稿を締め切り、十二月一日付創刊号を二月一八日頃発刊。太宰治「ロマネスク」、津村信夫「信濃とところどころ」、中原中也「詩集『山羊の歌』より」、雪山俊之「ナボレオンとラスコニコフ」のほか、課題欄「青い花」に、斧稜（小野正文）「あをければ」、北村謙次郎「われ失ふ」、久保隆一郎「Vergilの面」、青井はな（今官一）「かくれんぼ」、伊馬鶴平「広告」、檀一雄「詩譜」、山岸外史「一枚の絵葉書」、今官一「三つの祈り」、木山捷平「青い花の感想」等を掲載した。

『関係』この雑誌が発刊されると、まず尾崎一雄がいち早く『同人雑誌評』（『早稲田文学』昭10・1）で『ロマネスク』を取り上げて激賞、引き続き浅見淵も『同人雑誌評』（『早稲田文学』昭10・2）で『ロマネスク』を称揚して、識者の間に相当の反響を呼び起こすことになった。「青い